

清潔な生活

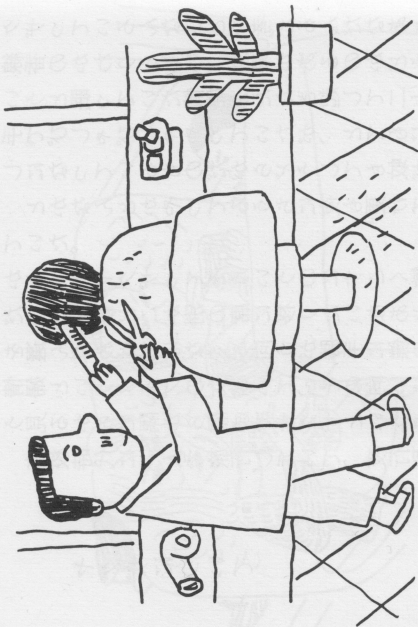
年をとると床屋と風呂が好きになるという。僕も素にそうである。まだ「好き」というところまではいかないけれど、少なくとも苦痛ではなくなった。

昔はそうではなかった。床屋とか風呂とか聞いただけで顔面が蒼白になるくらい嫌だった。床屋の椅子に一時間近くも座って頭をいじくりまわされるのなんてうんざりだし、風呂にのんびりつかっているのも腹が立った。

生まれつきせつかちというせいもあるけれど、やはりエネルギーが溢れていて長い時間じつとしてるのが耐えられなかったのだろう。

それでも高校生になりガールフレンドとつきあうようになってからはある程度清潔にしなくちやと思つて、我慢してまめに風呂に入ったり床屋に通ったりするようになった。すごく良いことである。

ところが大学に入って東京に出てきたとたんにもとの汚ない生活に逆戻りしてしまった。何故かという僕の大學生生活が学生運動、ヒッピー・ムーブメントのピークと、もろにぶつかってしまったからである。



なにしろあの頃は汚ないことがステータス・シンボルみたいなものだから、みんな床屋には行かない、髭は剃らない、風呂に入らない、服は変えない、もう無茶苦茶である。一カ月も頭を洗ってないなんて男はザラだった。

とにかくそんな具合に何年かを送り、結婚して、また清潔な日々がやつてきた。髪を短かくし、髭を剃り、何着かスーツを買った。最初のうちは義務的に、それから習慣的に、最近ではすすんで風呂に入ったり床屋に行ったりするようになった。髪だつて毎日洗うし、オーデオロンだつてつける。我ながらすごいと思う。

月に二回片道二時間かけて千駄ヶ谷の床屋まで行く。シャツのアイロンも自分でかける。まわりでは「わりに清潔な人」ということでおつている。昔のことは誰も知らない。人生つてなんだか妙なものだ。